

静岡県森林空間活用事例集

森で始める 事業のヒント

伊豆市の人と自然を愛する、関係人口の拠点作り。

企業・自治体研修

自然体験教育

関係人口

移住促進

進行中

伊豆市



伊豆市役所(伊豆市) × 一般社団法人mata-ne(伊豆市)

事業テーマ

伊豆市環境教育林の最大活用。教育・観光・移住促進の拠点に。

修善寺駅から車で20分程東に移動した山中にある(一社)mata-neの拠点、またね自然学校。主宰の斉藤夫妻が繋ぐ人との縁で、年間延べ2,000人が伊豆の自然を体験します。この拠点に隣接した伊豆市環境教育林で、またね自然学校の「縁の力」を軸に事業を構築していくプロジェクトが進んでいます。例えば全国の市町村で森林整備や環境教育の促進を目的に配分されている「森林環境譲与税」の活用先、特に都市部自治体の環境教育の選択肢としての発信。また首都圏企業が地域資源を体感する研修の場として営業していく等、伊豆市とまたね自然学校がタッグを組んで事業構築する挑戦が始まりました。



所有者と事業者の課題

伊豆市を「目的地」にする人の流れを、どう作るか。

伊豆市は修善寺など、全国に誇る観光地を有しますが、人口減少の厳しい波に直面しています。伊豆市農林水産課では豊かな自然の魅力をきっかけに、観光で訪れた人が伊豆市に生きる人との縁を紡ぐことで、何度もこの地を訪れる「関係人口」に育てていきたい、市有林をその舞台にしたいというイメージを持っています。しかし農林担当部署が直営でそのような事業を行うことは難しく、民間と協働での事業構築を考えパートナーを探していました。一方、市有林に隣接した森ですでに事業を展開していたまたね自然学校斉藤氏も、伊豆市と同じ「縁で紡ぐ」事業ビジョンを共有していました。



課題への突破口

首都圏企業や自治体への突破口。まず、実績を作っていく。

すでに森林整備の受託等を通じて築かれていた両者の関係を一歩進めるため、令和6年度に実施された静岡県森林空間活用支援事業でマッチングし事業化支援を受けることが決まりました。アドバイザーとして派遣された阪口瀬理奈氏との現状確認作業を経て、またね自然学校斉藤氏が自治体への営業やモデル事業の実施にリソースを割けるようにするため右腕となる人材を獲得する必要性が洗い出されました。その人件費調達にあたり、まず首都圏企業との関係構築が阪口氏から提案され、都内IT企業によるまたね自然学校の訪問が実現しています。伊豆市の未来を創造する協働に向けて、まずは事業者の体力作りから事業が進行しています。



check !

伊豆市役所



一般財団法人mata-ne 代表・斉藤大輔



森林所有者との信頼関係が、あなたの事業を实らせるカギ！



静岡県森林空間活用事例集

森で始める 事業のヒント

松崎町の山と海、農の体験を子ども達の原体験に。

森林環境教育

体験教育旅行

子どもだけ

地域まるごと

進行中

松崎町



丸高ティーティー株式会社(松崎町) × 株式会社愛ノ宮(浜松市浜名区)

事業テーマ

山と海がもたらす地域まるごとの学びを、幼児期の子ども達へ。

豊かな自然が広がる静岡県。上流の山々から河川が水の恵みを海までもたらしめます。そんな流域全体、広い目で捉えた自然環境を体感する機会は大人でもなかなかありません。愛ノ宮保育園では、伊豆の入り組んだ海岸とすぐそこに広がる山々を舞台に、園児たちだけの体験旅行の企画が進行中です。5歳の子ども達が親元を離れ、森林体験や川遊びに海水浴と、体験を詰め込んだ1泊2日のバス旅に伴走するのは、創立105年を迎え伊豆で80年以上、農林業事業を展開する丸高ティーティー(株)。松崎町で本気の林業と農業に向き合ってきた会社がアテンドする体験教育旅行です。



所有者と事業者の課題

働く保護者に代わって、子ども達に唯一無二の体験を。

愛ノ宮保育園の特色は、サービス業に従事するご家庭でも安心して子どもを預けられる土日開園。まとまったお休みが取りにくいご家庭に代わり園では日常的な保育の中の体験を大事にしています。そしてさらに一歩踏み込んで成長を促すため、子ども達だけの宿泊体験を検討していました。親元を離れて宿泊するのが初めての子どももいる中、地元浜松や袋井とは違う環境での体験旅行は、企画する先生方にとっても慣れない環境であり大きな負担がかかります。宿泊地周辺の自然環境に精通しているだけではなく、能動的に環境整備や地域との橋渡しができる、そんなパートナーが必要でした。



課題への突破口

伊豆での農林業に真っ正面から向き合う、経営者との出会い。

そんななか令和6年度に実施された静岡県森林空間活用支援事業を通じ、丸高ティーティー(株)農林事業部・高橋幸村氏との出会いがありました。丸高ティーティー(株)所有林の、管理が行き届いた林内や林道の管理水準の高さはすぐにも子ども達が体験活動に利用できるほどでした。さらに松崎町立の公園に隣接している所有林があり、水場やトイレ、東屋の活用も可能。森林空間の活用可能性を見越していた高橋氏と、(株)愛ノ宮代表・大石隆久氏は松崎町での体験旅行の実施に向けて動き出したのです。すぐに大石氏は保育園スタッフを含めた社員数名とともに松崎を訪れ現地を確認。スピード感をもって2025年夏の実現に向け動き出しています。



check !

丸高ティーティー株式会社 農林事業部 高橋幸村



株式会社愛ノ宮 代表・大石隆久



愛ノ宮保育園愛野園 園長・澤 寿美



森林所有者との信頼関係が、あなたの事業を实らせるカギ！



静岡県森林空間活用事例集

森で始める 事業のヒント

高山の香りからはじまる、南アルプスブランド化

シラビソ精油抽出

アロマ商品開発

精油抽出ツアー

多角的展開

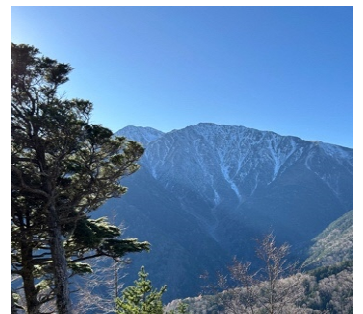


十山株式会社(静岡市葵区) × 銀の山(島田市)

事業テーマ

日本屈指の高山の価値を香りで伝え、南アルプスファンを生む。

静岡県の最北部、地図上のツノのような部分24,430haは、十山株式会社一社の所有林です。南アルプスに連なるこの森林の価値を最大化し保全していくのが十山株式会社の使命。ここに自生する高山特有の針葉樹・シラビソは近づくだけで清冽に香り立つ、象徴的な樹木です。この香りを精油として抽出し、アロマ商品として都市部に南アルプスブランドを広げていくプロジェクトが立ち上がりました。それを受け止めたのは、大井川下流域の島田市でアロマ蒸留所を開設し、地域の植物から地域の香りを抽出し商品化する「銀の山」主宰の希代氏でした。



所有者と事業者の課題

とにかく遠い南アルプス。心の距離をアロマで近づけたい。

十山(株)所有林は地図上の直線距離でJR静岡駅から55km。三島駅までと同じくらいの距離ながら、山道を車で4時間かかります。しかもアクセス道路である林道を通るには許可が必要で、一般の方が気軽に訪問できる場所ではありません。それでも南アルプスは大井川の源流。多くの人の命と暮らしの源を支える山であり、その価値を伝え、山と都市の間の経済をどう作るのが十山(株)の課題でした。すでにウイスキー醸造事業をスタートさせていますが熟成期間がまだ途上であり、その間手をこまねいているわけにいかないということで、「香り」に着目し高山の植物のアロマ製品開発を決めたのですが、製造とブランディングに一步を踏み出せずにいたのです。



課題への突破口

土地の記憶を、香りに込めて。銀の山との協業で広がる可能性

そんななか令和5年度に実施された静岡県森林空間活用支援事業を通じ、銀の山・希代智子氏との出会いがありました。銀の山のコンセプトは記憶を呼び覚ますその土地ならではの香り。十山(株)の求めるものと重なり、早速協業事業がスタートしました。山で蒸留した精油を希代氏の作る香りの世界観、ビジュアルでブランディングし、開発したアロマ商品を東京駅で試験販売したところ意外なほど男性に人気を博し、静岡パルコでの期間限定販売が決まりました。十山(株)でもこの精油抽出体験付きの観光ツアー開発をスタートするなど、事業は既に次の段階に進んでいます。価格決めを含め、アドバイザーの助力を得ながら商品の安定供給と販路の拡大を目指し、十山(株)と希代氏の挑戦は続きます。



check !

十山株式会社 代表・鈴木 康平



銀の山 代表・希代智子



森林所有者との信頼関係が、あなたの事業を实らせるカギ！



静岡県森林空間活用事例集

森で始める 事業のヒント

世界と日本の課題と可能性を、静岡の秘境で体感する。

企業向け社員研修

中堅社員向け研修

非日常体験

SDGs

静岡市 葵区(井川)



十山株式会社(静岡市葵区) × 一般社団法人グリーンパークあさはた(静岡市葵区)

事業テーマ

地域のイメージを拡張し、ビジネスの可能性を高める 企業中堅人材向け越境研修を、南アルプスで。

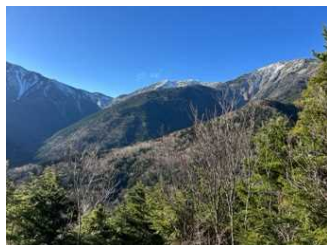
持続可能な社会を目指して社会課題を製品やサービスの開発によって解決する取組は、企業活動にとっても新しい事業機会です。機会創出に向き合う企業人向けに、静岡県の最北部・十山(株)井川山林での研修事業の構築が進んでいます。パートナーは、井川山林と同じく自然共生サイト(民間の取組等により生物多様性が保全されている環境省認定の区域)に認定されている静岡市あさはた緑地の運営に携わる(一社)グリーンパークあさはた。自然と人間社会の共生を目指した一歩目を踏み出そうとしています。



所有者と事業者の課題

企業活動と、社会的課題。新たなビジネスで解決に挑むために。

(一社)グリーンパークあさはたの木下氏は静岡市の指定管理者として環境共生型の公園運営に携わるなか、企業との連携を進めたいと考える一方で具体的な連携に結びつきにくいことに課題意識を持っていました。また、「社会」や「環境」について考える土台として、現状認識や共通体験を得る機会を作る必要性を痛感していたのです。例えばSDGsなど、優先的に取り組むべき社会課題は共有されるようになりましたが、貧困や格差の拡大、ますます深刻化する気候変動など非日常的なスケールの課題を解決するための事業展開をイメージすることは困難を伴います。だからこそ広い視野を持ち事業創造に取り組める人材の育成が求められるのではないかと考えていました。



課題への突破口

非日常の大自然と、暮らしとともにある自然。 2つを知ることによって新たな視点を得る。

そんな中、木下氏は令和6年度に実施された静岡県森林空間活用支援事業を通じ十山(株)井川山林を訪問します。この圧倒的な自然環境と、あさはた緑地の日常的な自然環境の両方を体験することで、事業創造に向かう視座を得られるのではと考え中堅社員向けの研修事業の構築が始まりました。研修に対する企業側の具体的なニーズを探るため事業化支援アドバイザーの阪口瀬理奈氏の支援で企画書を作成。また企業の人事担当者との面談機会を得て研修への印象を調査したところ、予想以上に関心が寄せられました。数社の関係者でまず現地下見を兼ねたモニターツアーが5月に企画されています。画期的な研修実現へ、歩みを進めています。



check !

十山株式会社 代表・鈴木 康平



一般社団法人グリーンパークあさはた 代表・木下 聡



森林所有者との信頼関係が、あなたの事業を实らせるカギ！



静岡県森林空間活用事例集

森で始める 事業のヒント

森とともにある循環型生活を、いまの子ども達に

浜松市浜名区

幼児森林環境教育

循環型の暮らし

森を地域に開く

食育



一般社団法人里の家(浜松市浜名区) × 株式会社愛ノ宮(浜松市浜名区)

事業テーマ

森とともにある循環する暮らしを、いまの子どもたちへ。

現代の便利な暮らしの中で、子どもたちが自然と暮らしのつながりを実感する機会は少なくなっています。愛ノ宮保育園浜名園の子どもたちが通うのは、浜松市都田町にある古民家「里の家」です。「懐かしい未来」をテーマに、森と田畑に囲まれた里山で、自然と暮らしが循環する環境を活かしながら、子どもたちは火を囲み、土に触れ、風を感じ、自分の感覚で自然と関わる時間を過ごしています。ここでは、自然・食・遊び・暮らしが切り離されることなく、一つの時間として存在しています。それは単なる自然体験ではなく、人と自然、暮らしと食、そして人と人とのつながりを、子どもたちが身体を通して受け取っていく場となっています。



所有者と事業者の課題

暮らしと自然が切り離されたいまの子ども達。体験を、もう一度繋ぎたい。

食育を園の大事な方針に掲げる愛ノ宮保育園浜名園。園内で栽培した野菜を園内調理し、美味しく栄養のある食事を通して、食育体験を届けています。しかし、調理の原点である「火」を園内で使わせることは安全管理上難しく、子ども達に火と食の体験を届けることはできませんでした。浜名園の澤園長、(株)愛ノ宮の大石社長はともに自然が持つ子どもへの教育力の大きさを大切に考えていましたが、なかなかチャンスに恵まれることはありませんでした。浜名園は周囲に郊外型の住宅地が広がり、歩いて行ける自然は近所のお寺のみ。園バスでの園外保育を検討しつつ、きっかけを探している状態でした。



課題への突破口

火と風と土に触れる、子どもたちの里山

令和5年度に実施された静岡県森林空間活用支援事業を通じ、愛ノ宮保育園浜名園は、同じ浜名区内で里山体験活動を行う一般社団法人里の家代表・加藤氏と出会います。里の家ではこれまで、保育園・幼稚園・こども園など、幼児期の子ども達を対象とした自然体験を数多く受け入れてきました。火・食・自然・遊びがつながる里山体験は、愛ノ宮保育園が大切にしている「子ども主体」の保育理念とも自然に響き合いました。令和6年12月に実施された園外保育では、子どもたちは森で拾った枯れ枝を使って火を熾し、かまどに火が入る様子を見つめ、焚火で焼いた焼き芋を味わいました。火のぬくもりや煙の香り、仲間と囲む食の時間を通して、子どもたちも職員も、自然と共にある暮らしの豊かさを感じました。自然とつながる生活体験が、子どもたちの心に静かに刻まれています。



check !

一般財団法人里の家 代表・加藤正裕



株式会社愛ノ宮 代表・大石 隆久



愛ノ宮保育園浜名園 園長・澤 寿美



森林所有者との信頼関係が、あなたの事業を実らせるカギ！



静岡県森林空間活用事例集

森で始める 事業のヒント

中小企業の社員にこそ、地域の森と林業の体験を。

企業向け社員研修

林業体験

越境研修

進行中

浜松市天竜区



(一財)史春森林財団(浜松市天竜区) × (有)天竜フォレスター(浜松市天竜区)

事業テーマ

歴史ある天竜林業の奥深さと底力で、地域の企業人材の育成を。

浜松に水の恵みをもたらす天竜川と、日本三大美林として名高い天竜林業。自然と人が歴史の中で守り育んできた資源が地域の産業を支える基盤であることを、企業人こそ理解し次世代の産業を考える礎にしてほしい。そんな研修事業の構想を持ったのが、個人所有林の遺贈を受けて財団化した(一財)史春森林財団・菅野氏と、天竜地域2,300haの山林を委託管理する(有)天竜フォレスター今井氏でした。林業を主産業としつつ、森林空間そのものの価値を発信する事業への挑戦が始まっています。



所有者と事業者の課題

企業は人材育成に何を求めるのか。手探りで始まった企業研修誘致

史春森林財団と天竜フォレスターは所有者・事業者の立ち位置を超え、パートナーとして共に研修事業誘致へのビジョンを持っていました。ただ両者とも森林・林業の専門家ではあっても森林を舞台にした研修の企画は未経験。財団には森林ツアーの企画運営経験のある人材がいるものの、いまの企業が人材育成に求める成果や、企業が一般的に研修に投じられる予算枠、社員を研修に送り込む現場の本音などの情報が十分ではありませんでした。さらに研修を売り込むための企業との接点が未だなく、どこを突破口に事業を切り拓いていけば良いのか、模索が続いていました。



課題への突破口

地域の食を担う総合食品メーカーとの出会い

そんな中令和6年度に実施された静岡県森林空間活用セミナーにて、県下で越境型の企業研修を構築・運営する飯倉清太氏と出会います。飯倉氏から、企業は変化の激しい社会に対応できる人材を期待しており、例えば社外に飛び出し社会課題を解決するビジネスプランを社員が考え地域の当事者の前でプレゼンテーションをする、越境型の研修が始まっている事例を紹介され、関係者間で研修イメージが共有されました。同時進行で、史春森林財団の菅野氏と以前よりつながりのあった、地元の食を担う総合食品メーカーとの社員研修の検討が始まりました。早速、飯倉氏と共に直接天竜の山林を見学しつつ、企業の目指す成果と森林所有者側の願いを摺り合わせながら、実現に向けて動き出しています。



check !

(一財)史春森林財団 代表・菅野知之



(有)天竜フォレスター 代表・横山 憲



森林所有者との信頼関係が、あなたの事業を実らせるカギ！

